KANKO TIMES Vol.8

〈編集・発行元〉
一般社団法人
カンコー教育ソリューション
研究協議会

制作／山陽新聞社広告本部

特集 これからの学校を考える

【1·2面】人づくりインタビュー リアルな体験が「考える脳」をつくる 東北大学 加齢医学研究所 所長 川島 隆太教授

【3面】外部の力を活用した部活動支援の取り組み 杉並区教育委員会 小林 淳さん 杉並区立高円寺中学校 橋本 剛校長

人づくりで地域とWIN-WINの関係を 岡山県立井原高等学校 新体操部監督 長田 京大先生

【4面】日々の学びをつなぐ特別活動 ～津商モールに取り組んだ生徒たちの成長の軌跡～ 岡山県立津山商業高等学校 槇野 滋子校長

掲載記事の詳しい情報はカンコーWEBサイトのメディア情報からご覧いただけます。WEB限定記事もお読みいただけます。

カンコー学生服

人づくりインタビュー【Vol.5】

東北大学 加齢医学研究所 所長
川島 隆太 教授

リアルな体験が「考える脳」をつくる

子どもの創造性を育む学校教育の在り方

**第4次産業革命をはじめ、急激な社会変化の過渡にある現代。
子どもたちが未来を生きるためには、創造性、主体性などを育てることが重要になります。
これらの力を養うには、いかに中高生の時期に
“リアルな体験”から知識や経験を得るかがカギとなります。
子どもたちの「自ら考える力」をいかに育むべきか、
脳機能開発研究の第一人者である東北大学・川島隆太教授にお聞きしました。**

かわしま・りゅうた
東北大学加齢医学研究所所長。東北大学大学院医学系研究科修了。スウェーデン王国カロリンスカ研究所、東北大学加齢医学研究所助手、講師、教授を経て、2014年より現職。人間の脳の働きを画像として計測する脳機能イメージング研究の日本における第一人者。脳科学の知識と技術を用いた「教育」の研究をはじめ、「教育」に脳科学のメスを入れる。

人間らしく生きる力は未来の社会を生き抜くカギ

将来、人工知能（AI）が社会で本格的に導入されると、私たちの仕事の多くはAIに肩代わりされることになります。そうした社会の中で、人間に求められる仕事は、AIより優位である、何か新たなものを生み出す力、創造性が試されるものが中心になってくるでしょう。つまり「解のない問題」に取り組み、それを考え抜く力が、これからの社会を生きる子どもたちには必要になります。

人が解のない問題を考える時、脳の「前頭葉」の言語領域、「側頭葉下面」の知識領域を使い、さまざまな学びや経験から得られた知識のデータベースから情報を引き出し、それを言語化して答えを導き出します。解のない問題を考え抜く力を養うためには、こうした脳の部分を発達させなければなりません。多種多様の知識を教え、それを自らの言葉で表現できる能力を身に付けさせることが大切です。

そのためには、まず読書ができる能力を育てるとともに、体験活動や部活動などを通じて、社会を知るリアルな体験をさせることが重要になります。特に思春期である中学・高校時期は、思考や創造などを司る脳の「前頭前野」が非常に強く発達するスイートスポットなので、できるだけ多くの知識を入れ、さまざまな体験を積ませることが、脳を大きく発達させます。「自分で考える力」とは、「人間らしく生きる力」、これを身に付けていくことが、これからの社会を生き抜くカギとなります。

超高齢社会は賢く老いるスマート・エイジング

AIの社会導入とともに、子どもたちが直面するのが「超高齢社会」。彼らは同胞の数が圧倒的に少ない中、大多数の高齢者たちを支えなければならない、歪（いびつ）な社会を生きなければなりません。そうした社会では、高齢者がいかに活力を持って生きるかによって、社会全体の成長も左右されます。

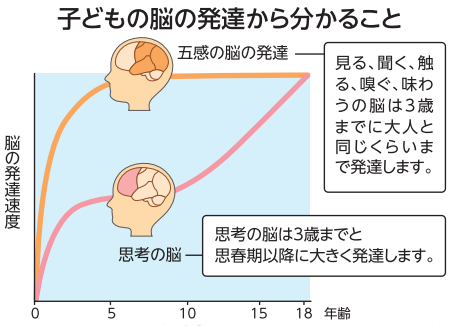
老いることを否定的に捉えるのではなく、ポジティブに捉え賢く生きていくこと、それが私たちの提唱する「スマート・エイジング」の考え方です。われわれは「年を取る＝悪いこと」と後ろ向きに考えがちですが、一方で、年を取ることは「成長」することでもあります。年を重ねれば物事の見方が深まり知的に成熟するなど、高齢期でも人間としての成長は続いているのです。老いに抗（あらが）い、否定的に生きるよりも、老いを受け入れ、いかに豊かに賢く生きていくかを考えることは、若い世代にも活力を与えるでしょう。

子どもたちに超高齢社会をどう生きていくかを考えさせることも大切ですが、私たち大人もどのように生きていくのかを、ともに考えることは必要でしょうね。

学ぶ意欲の源泉は基本的生活習慣

学習や体験からさまざまな知識を学ばせるためには、学ぶ意欲を高める必要があります。これまで小中学生を中心に調査・研究を行ってきましたが、そこから見えてきたものは、学ぶ意欲には基本的生活習慣が大きく影響していること。特に食習慣は影響が強く、一日三食をきちっと食べている子どもと、そうでない子どもでは、学力に大きな差があり、基本的生活習慣の乱れが学力や学ぶ意欲を大きく引き下げるリスクがあるという科学的エビデンスが得られました。

子どもの脳の発達から分かること



出典：宮城県・宮城県教育委員会「川島隆太教授と考える うちの子の未来学」

まずは現状把握から始めてみませんか？

カンコー教育ソリューション研究協議会は、
「子どもたちのみらいのために、学びのいまがどうあるべきか」
ミライを生き抜くチカラをともに考え、実践する協議会です。

一般社団法人 カンコー教育ソリューション研究協議会

詳しくはコチラ

カンコーホームルーム

カンコーホームルーム

調査対象 一般社会人1,500名
調査方法 インターネットリサーチ
調査時期 2018年1月

あなたが学校生活で得たものは何ですか？（複数回答可）

1位 友人・仲間 …… 67.2%
2位 基礎学力（読み、書き、算数、基本ITスキルなど） 53.7%
3位 基本的な生活習慣（公共心、倫理観、基礎的なマナーなど） 42.5%
4位 社会人基礎力 32.1%　5位 人間性（思いやり） 30.7%

KANKO TIMES Vol.8

生活習慣は学ぶ意欲の源泉であり、子どもたちの生活習慣を見直すことが、意欲を向上させる最善策です。「努力しても自分に返ってこない」、生活習慣の乱れは、そういった状況に陥る危険性をはらんでいます。

いかに子どもに基本的生活習慣の重要性を認識させるかが、思案のしどころですが、私は科学的エビデンスに裏付けられたデータを活用して、子どもに〝考えさせる〟ことで、リスクを理解させることがもっとも良いと考えています。

例えば学級活動やホームルームなどの時間を活用し、基本的生活習慣について生徒と教員がともに考える機会を作るといいでしょう。科学的データを用いてリスクを示し、いま自分の置かれている状況はどうなのかを振り返らせ、生活習慣の乱れによる自分の人生への影響を考察させる。現状に問題があればソリューションを探らせる。自分で考え、選択することで、子どもたち自身が問題意識を持ち改善に取り組めると思います。また積極性や主体性を養うことにも自然とつながっていくのではないでしょうか。

スマホの長時間使用は脳の学ぶ機能を低下させる

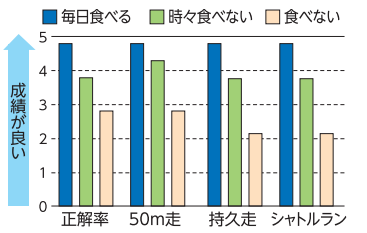
生活習慣とともに学力や学習意欲に影響を与えるものとして、スマートフォンの長時間使用の問題があります。近年ではこのリスクについて科学的データも多く発表されています。

スマホの恐ろしいところは、複数の事を同時に行う「マルチタスキング」であること。勉強しながらSNSをしたり、ゲームをしたりできるため、勉強はおろかSNSにも、ゲームにも集中できない状態に陥り、集中力を大きく押し下げると懸念されています。私たちの研究でも、スマホを併用して勉強することで、学習が定着せず、学力を低下させる恐れがあることが分かってきました。スマホ使用の改善は、喫緊の課題です。

まず「言って聞かす」よりも、「考えて自分の問題として認識させる」ことが改善に向けた一歩だと考えます。リスクの科学的根拠を子どもたちに示し、スマホを使う理由や、将来への影響など、リスクとベネフィットを考えさせ、どのように使用すればいいかを検討させる。そして子ども自身が使用を抑制するセルフディフェンスにつなげることが大切です。

朝食と正解率、運動能力との関係

毎日朝食を食べる子どもは、
正解率と運動能力が高い傾向にあります。



出典：宮城県・宮城県教育委員会「川島隆太教授と考える うちの子の未来学」

やる気を高める即時フィードバックを応用して

学ぶ意欲の向上に有効なのが、「即時フィードバック」。子どもが何かに取り組んで達成した、うまくできた時にすぐに反応して、褒める・評価することは、子どものモチベーションを高めるとともに、主体性や自主性を育てる上で重要だと考えられています。

子どもと1対1の場合ならば、すぐに反応できても、マスの教育現場で、すぐに反応して評価するということは難しい面もあります。しかし、誰でも褒められればうれしいものであり、それが更なるモチベーションを引き出すことにも。部活動でも厳しく指導するだけでなく、褒めて伸ばすことで、やる気だけでなく、パフォーマンスの向上にもつながるのではないでしょうか。教員は即時フィードバックを自分なりに応用して、教育の場で活用できれば、より学ぶ意欲を引き出せるでしょうね。

学校教育や部活動は大学や地域のリソースが有効

さまざまな体験や経験は、クリエイティブな思考を育てる上では欠かせないものですが、他者と交流しコミュニケーションを取る、実際に足を運び仲間とともに汗をかくといった〝リアルな体験〟でなければなりません。リアルな体験は知性を大きく育てます。特に脳が強く発達する中高校生の時期に、多くの体験をさせたいものです。

本来、体験活動は家庭や地域が役割を担うものですが、家庭・地域ともに教育力が大きく低下している現状、学校教育で体験活動を実践することは、子どもたちと社会をつなぐ上でも、意義のあることです。しかし、教員の負担も考えれば、体験活動や部活動は、地域の人など学校外の大人の助力も考えていかなければならないでしょう。

特に部活動は社会体育の活用も検討してみることも大切。部活動を地域に委ねられれば、教員の負担軽減にも寄与でき、子どもたちの異年齢交流や地域社会を知るきっかけにもなります。リアルな体験は学校と地域が手を携えながら行うことで、より実りのあるものになるのではないでしょうか。

また、教員の働き方改革が注目される中で、授業などにも学校外の人材が持つリソースを活用することができれば、教員の負担を軽減する一つのアイデアになると考えています。例えば、生徒にテーマを与えて考えさせるという授業を行うとき、教員がそのテーマのエビデンスやデータを自ら収集して準備するというのは、大きな負担になります。そういう時は、地域にいる大学教員を大いに活用してほしいですね。大学にはさまざまな研究があり、データも豊富です。そういった研究を社会のために活用することも、大学の一つの使命でもあります。

また大学教員が中高校生に、自分の研究を講義することは、研究者をステップアップさせる貴重な機会。生徒に分かりやすく説明するためにはどうすればいいかと考えることは、新たな研究の可能性を見出すチャンスにもなります。大学教員を学校教育で活用することは、子どもたちの考える力を育てることに有効であり、且つ学校教員の負担軽減にもつながる。そのうえ研究者の成長にも貢献できる。このように地域や大学など学校外の人材をうまく学校教育に取り入れることは、教育全体に好影響を与えてくれるのではないでしょうか。

地域や大学など学校教育に利用できるものは、積極的に取り入れて利用する、それが教員の仕事を効率化するうえで一番だと考えています。地域にはさまざまな人材や知的財産が眠っています。少し視線を学校外に向ければ、子どもにも教員にも有益なリソースを見つけることができるかも知れません。

本を読む習慣は脳の発達に直結している

学校教育では、さまざまなことが変わりつつありますが、基礎基本をきちんと子どもに教えることは重要で、変わらず続けてもらいたいことです。読むこと、書くこと、生活リズムを乱さないことなど、そうした基本を確実に身に付けさせることが、脳の発達にはもっとも良いと脳科学では示されています。

特に本を読むことは、文字情報から自分でストーリーを組み立てて、それを記憶しながら展開しなければならないため、考える力をもっとも発達させることができます。本を読むことは、実はとても難しいことなので、中学・高校の時期に、読書の習慣を身に付けさせてあげることは大切です。こうした基礎基本を教え、頭を使うことは、子どもたちの未来の幸せへと直結しているのです。

子どもたちとともに考えることができる「考える教員」を目指して

基本的生活習慣や本を読む習慣を身に付けさせること、体験活動でリアルな体験をさせることなどが、子どもの自ら考える脳を育てるために必要だと述べてきましたが、もう一つ必要なものがあります。それは「考える教員」の存在です。創造性の高い子どもを育てたくても、指導者に考える力がなければ、クリエイティブな子どもは育ちません。現状では、教員は多忙で何かを「考える」時間的余裕が少ないのが実情です。

教員の多忙を解消するには社会全体での体制づくりが必要ですが、身近にできる取り組みとしては、やはり学校と地域との関わりをさらに深めることではないでしょうか。地域が学校教育の一翼を担えば、教員にも時間的余裕が生まれ、考える余裕ができる。

そして子どもだけでなく、教員もともに考えることが大切です。例えば、基本的生活習慣やスマホのリスクの問題は、科学的エビデンスを使いながら、教員もともに考えてもらいたいですね。教員が考えられるようになれば、指導方法を工夫しようと思えるようになり、それが学校教育の質を上げていく。教員と考え合い、学び合うことができれば、子どもたちの脳も刺激され、考え抜く力が自ずと養われていくと思いますね。

（取材／川田達彦）

KANKO TIMES Vol.8

事例紹介

地域と連携した 新たな部活運営の取り組み

子どもたちの人間形成や社会で生きる力の養成に大きく影響する部活動。いまその在り方が問われ、注目を集めています。持続可能な部活動にするためにはどうすればいいのか、地域や行政と連携しながら、新たな部活動のスタイルに挑戦しているところも出始めています。そんな、先進的な取り組み事例を紹介します。

外部の力を活用した部活動支援の取り組み

杉並区教育委員会
学校支援課 課長代理
小林 淳さん

全国初の「学校教育コーディネーター制度」や全小中学校を対象にした「学校支援本部事業」など、地域が学校を支える仕組みを推進する東京都杉並区教育委員会に、部活動への支援事業について伺いました。

「教職員の多忙化」を背景に、杉並区では平成14年から部活における教員の負担軽減と活性化を目的に地域人材を活用した教育支援改革に取り組んでいます。

そのひとつが中学校の部活動を専門性のあるコーチが指導する「部活動活性化事業」。区教委が契約した企業や団体に所属する専門コーチに部活指導を委託し、生徒たちの活動を充実させつつ、教員の負担軽減も目指しています。区内の和田中学校に採用した民間人校長の発想で取り組んだ活動を区教委が事業化。平成28年度には区内23校中、17校が取り組んでいます。

杉並区の部活支援事業には、地域人材であるボランティアの協力による「外部指導員事業」もあり、この2事業により中学校の部活動を支援しています。「外部指導員事業」は、文化部も含めて総勢250名の地域ボランティアに支えられており、参加者を対象とした研修会では、「中学校の部活動」「外部指導員事業」「部活動活性化事業」などの理解を深めながら、各自の活動について学んでいただくと共に、部活動を支える地域人材の育成も同時に行っています。杉並区の部活動支援事業の特徴は、従来の部活動の復活を目指しているところ。少子化などの影響により、これまで通りの部活動の実施が困難な部が増加傾向にあるため、最適な支援策を模索するには、リサーチ力が不可欠です。杉並区では、学校現場の声を聞き取ることを大切にしながら、学校ごとに部活顧問のタイプを分析したり、生徒の在籍数、公立中学校への就学状況を調査したりすることで、地域の実情に即した取り組みを大切にしています。

学校現場の教員からは、自身の負担軽減はもとより、外部のスキルや経験を生かすことで、練習内容が充実した、生徒のモチベーションが上がった、などの声が寄せられ、担当としても本事業のメリットを実感しています。

（取材／上松利弘）

杉並区教育委員会の部活動支援事業

◆導入した背景（生徒数の変化：概算）

	クラス数	生徒数
昭和58年（1983年）	400学級	約17,000人
	↓50%減	↓61%減
平成28年（2016年）	200学級	約7,000人

生徒数の減少によって1校当たりの教員数が減少

専門外で指導できない教員が増え負担が大幅に増加

◆部活顧問タイプ別の支援内容

Aタイプ	部活に熱心な先生	先生自身が担当
Bタイプ	中間層	外部指導員（地域人材、資格要件なし）
Cタイプ	管理顧問	専門コーチ

部活動ができる喜びが生徒のやる気にもつながっている

杉並区立高円寺中学校
橋本 剛 校長

本校では2年前から部活動活性化事業を導入し、バスケット部と硬式テニス部で専門コーチを活用。生徒たちがやりたい部活をきちんとした指導のもと楽しめていることが、うれしいですね。部活が彼らのやる気の源泉にもなっていると感じます。

専門コーチが責任を持って指導し、試合にも帯同してくれるので、顧問教員の負担が軽減されとても助かっています。部活の時間を自分の仕事に充てられ、以前より早く帰宅できるようにもなりました。

部活は人間関係を学ぶ最大のチャンスだと思います。異年齢の集団の中で、チームとしての在り方や役割など、社会に出てからも役立つ力を学べるため、意義のある活動だと改めて感じています。

今後、部活を地域に任せていくことも必要だと思います。「不易流行」という言葉があるように、部活の持つ意義は大切にしながら、その時代に合わせて運用方法を変えていくことも、部活を続けていくために必要なのかもしれませんね。

人づくりで地域とWIN-WINの関係を

岡山県立井原高等学校
新体操部監督
長田 京大 先生

岡山国体で新体操男子総合優勝をはじめ、数々の栄冠を手にしてきた岡山県立井原高校新体操部は、地域や行政との関わりや協力で大きく発展してきました。地域を巻き込んだ部活動の在り方について伺いました。

地域や行政とのつながりは まずは人間関係から

井原高校新体操部は、平成17年の岡山国体で井原市での新体操競技の開催が決定したことを受け、創設。あれから約20年経ちますが、地域や行政にさまざまな面で支えを受けています。

当初は全くのゼロスタートだったため、まずは協力者を募ろうと、行政や地域の各方面に出向き人間関係を築いていきました。それが、その後の指導体制や練習環境の整備のバックアップにつながったと思います。

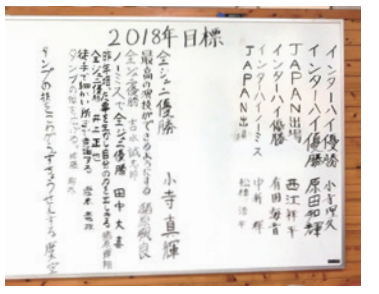
特に部活動と同時に立ち上げた小中学生対象の体操教室の指導では、もう一人指導者を充ててほしいと行政に掛け合ったところ、適材を採用してもらえ、2人体制で指導ができるように。行政の支援の心強さを実感しました。

国体終了後も、井原市は「井原を新体操のまちに」をスローガンに支援を継続。私たちも新体操のイベントを毎年開催し、市内外の人たちにPRするなど、新体操が「町おこし」につながっていると感じていますね。

保護者のサポートも強く、特に卒業生の保護者は、いまだに部活動やクラブを支えてくれる「地域の応援団」として心強い存在です。こういった支援体制を形にしたいと思い「井原市体操協会」を今年設立。協会のおかげで協力したいと思っていた地域住民も参加しやすくなり、支援の輪は広まっています。

社会体育と組み合わせ 練習時間を確保

生徒たちには、地域の人々の支えによって今があること、自分たちは「地域の誇り」であることを強く意識させています。期待され、注目されるという自覚が持てると、自ら部活を引っ張っていくという積極性が芽生え、自分で考えられる生徒に育っていると感じています。



生徒一人ひとりの目標と、その練習メニューを宣言させることで自主性を育む

部活だけでは練習時間を確保できないため、社会体育を活用した独自の工夫も実践。部活は18時30分までですが、それ以降は同じ場所で井原市体操クラブとして活動し、地域の子どもたちとともに練習。生徒や保護者が納得した上でしっかりと練習に取り組める、関係者全員が「Win」な関係が築けたと思っています。

新体操に限らず、さまざまな部活でもWin-Winな関係はできると思っています。そのためには、学校も地域も少し歩み寄ること。まずは声を掛け合い、人間同士がつながり合えば、協力体制ができ上がっていくと信じています。

（取材／山内將太）

KANKO TIMES Vol.8

キャリア教育取り組み実例

日々の学びをつなぐ特別活動

～津商モールに取り組んだ生徒たちの成長の軌跡～

岡山県立津山商業高等学校は、生徒が地元企業と連携し、仕入れから販売までを行う大規模な学校行事「津商モール」を行っています。さまざまな教科の授業の中で、津商モールに関連した取り組みを扱っており、日々の学びが特別活動によって、まとめられ、つむがれています。集団的な活動や自主的・実践的な活動によって、主体的に行動しようという意識が芽生える生徒も増えています。

生徒インタビュー

日々の学びが津商モールにつながっている

岡山県立津山商業高等学校
3年 武本 莉奈さん＝社長担当……写真左
3年 香山 綾乃さん＝副社長担当…写真中央
3年 津田 菜月さん＝副社長担当…写真右

―津商モールを実践して、入学前とどう意識が変わりましたか。

武本　入学前は津商モールを知らなかったのですが、たくさんの地域の方が来られていて認知度の高さに驚きました。実際に関わるようになってからは地元企業がとても協力的で、学校外の人たちの協力があるからこそ、津商モールは成功するんだと実感しました。

香山　はじめは文化祭のようなイメージでいましたが、自分たち生徒が楽しむのではなく「お客様」を楽しませることが重要な活動なんだと気づきました。自分がお客様だったら、どうすれば喜ぶだろうかということをいつも念頭に置いて取り組めるようになりました。

授業で制作したリーフレット

津田　先生が先導してやっていく行事だと思っていましたが、自分たちで積極的に取り組んでいかなければいけないと感じました。2年生で店舗を任されたり、企業と直接交渉したりしていくなかで、自分たちで行動する力は何よりも大切なことだと意識が変わっていきました。

―自分たちの想いが反映できたPRポイントはどこですか。

津田　地元の番組で津商モールについて告知できたことです。私たちのなんでも積極的に取り組んでいこうという強い気持ちが伝わって、採用されたのかなと思っています。

―意見が違ったとき、割れたときはどう対処しましたか。

香山　とにかく話し合って、3人が納得する答えや選択肢を出し、選ぶようにしました。3人とも言いたいことは口にする性格なので、それが自然とできていたと思います。また3人なので、いつでも気軽に話し合える感じが良かったと思います。これは私たち3人だけでなく、店舗（ホームルーム）や係単位でも同じだったはずです。話し合い活動が日常となりました。

―日常の教科や科目で学んだことが津商モールに生かされていると思いますか。

武本　教科・科目の授業では津商モールを扱う機会がよくあります。授業の中で考えられるため、クラス全員で成功させていこうという思いが高められていると感じています。またマナー学習も含めて、部活動や日常の学校生活で身に付けたものも津商モールに生きていると思っています。

詳しくはWEBで　カンコータイムズ

育みたい資質・能力の焦点化で生徒たちの行動も変わる

岡山県立津山商業高等学校
槇野 滋子 校長

津商モールは、地域社会と関わりながら生徒たちがいきいきと学習活動を展開できる、商業高校らしい学校行事であり、キャリア教育を実践する貴重な機会。この津商モールをもっと活性化させることは、地域活性化、ひいては津山市が抱える人口減少の課題解決に寄与できると思い、昨年度から文部科学省の研究指定を受け、社会で必要となる資質・能力を特別活動を核として身に付けるキャリア教育の取り組みを行っています。

「つしょうレインボー・プロジェクト」という愛称で、身に付けさせたい7つの資質・能力を整理。行事ごと、役割ごとに資質・能力を焦点化しています。例えば、津商モールでは「状況把握力」「プレゼンテーション力」など。そうしたことで意識して行動しようとする生徒も多くみられるようになりました。

また授業でも津商モールに向けた取り組みを展開。商業の授業では津商モールの売上データを使ったり、国語の授業では店舗のキャッチコピーやリーフレットの作成など、教科横断的な視点で取り組んできました。この2年間で、主体的に考えるなど、私たちが向かってほしい方向へと進んでくれる生徒は確実に増えており、特別活動の素晴らしさを実感しています。

今後も津商モールを中心に、地域に根ざした視点から世界を見据えることのできる人材「ローバル人材」（ローカルとグローバルを合わせた造語）を育成したいと思っています。

（取材／川田達彦）

《取材を終えて》

今回の取り組みで特筆すべきは、新たな取り組みを始めたわけではなく、既に行われている教育活動を棚卸し、育みたい資質・能力ベースで再整理・マイナーチェンジしていること。普通科校でも、文化祭や体育祭などを中心として十分に展開可能な事例ではないかと思います。まずは、教育活動の現状把握、棚卸しから始めてみてはいかがでしょうか？

「津商モール」とは？

3年生の授業「課題研究」を中心とした販売実習。2017年で9回目を迎え、1日で3,000名以上が来場する。地元商工会議所が主催の職業体験イベント「キッズビジネスタウン」と連携しており、地域の小学生も参加。中学生のお店も展開。

「津商モール」での段階的な学びの仕組み

1年生 キッズビジネスタウン　子どもたちと関わりながら地域企業を知る
▶▶
2年生 販売店舗　店舗運営の企画実践
▶▶
3年生 全体企画 店舗運営　2年間の学びの集大成

つしょうレインボー・プロジェクト

身に付けたい7つの資質・能力

①状況把握力（自分と周囲の人々と物事との関係性を理解できる）
②問題発見力（社会のニーズを見つけることができる）
③アイデア力（モノ、サービスを考案することができる）
④チャレンジ力（試行錯誤できる、失敗にくじけない）
⑤企画立案力（アイデアを具現化することができる）
⑥チームワーク力（多様な他者と力を合わせて行動することができる）
⑦プレゼンテーション力・コミュニケーション力
（自分の考えを相手にわかりやすくまとめて伝えることができる）

カンコータイムズのアンケートに答えて
抽選でプレゼント!

1 資料探し・共有する時間を削減
高速読み取りスキャナー（A4サイズ対応）
《FUJITSU / ScanSnap S1300i》
・AC電源不要（PC接続）でどこでも起動
・Wi-Fi経由でタブレット等へ即共有
1名様

2 体力測定や部活動のデータ集計を効率化
Bluetooth®搭載 高機能ストップウォッチ
《CASIO / HSB-100W-1JH》
・計測データをiPhoneへ簡単転送
・CSVファイル化でデータ管理を効率的に
・丈夫&簡単で生徒にも任せられる
5名様

3 子どもたちや先生方の新たな学びのおともに
図書カード1,000円分
《菅公学生服》
10名様

WEB応募フォーム

応募方法　同封のアンケート用紙またはWEBの応募フォームよりご応募ください。（応募締切／2018年5月11日）

KANKO
発行：菅公学生服株式会社 教育ソリューション事業本部内
一般社団法人 カンコー教育ソリューション研究協議会 事務局 カンコータイムズ編集部
メールアドレス：k-solution@kanko-gakuseifuku.co.jp
TEL：086(898)2590　FAX：086(898)2513
カンコー学生服

ご意見・ご感想、取材のご希望についてはメールアドレスもしくはWEBにて受付を行っております。
カンコータイムズはこれからも不定期に発行していきます。
次号をお楽しみに。
カンコータイムズ vol.8 2018年3月発行